

1番目、子どもの自立に向けた継続的な支援について。

文部科学省の調査で「不登校児童生徒」とは、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義しています。

この定義で見ますと、平成28年度大府市では、小学校で33人、児童全体の0.6%、中学校は103人で生徒全体の3.8%に当たる児童生徒が不登校ということになります。しかし、遅刻や早退をしても「出席」となりますので、今は何とか登校できているけれども、何かを抱えながら苦しんでいる子どもいるのではないのでしょうか。

大府市の130人を超える不登校の子どもたちのうち、適応指導教室「レインボーハウス」には約1割の児童、生徒が通っています。では、100人を超える残りの子どもたちはどのように過ごしているのか、という疑問が今回、私が質問に取り上げた理由であります。

大府市では、先進的な教育を始め、スクールライフサポーターや心の教室相談員、給食の自校方式など、様々な事業や支援が行われています。しかし、どれだけ良い教育を行っていても、学校に通えていなければ同じ教育が受けられません。不登校の理由については、100人いれば100通りの理由があるかもしれません。又は、「理由がわからない」と苦しい状況にいる家庭もあります。一人ひとり、一つひとつケースが違うため、大変難しいことではありますが、ゆっくりでもいずれ個々の生き方を見つけ、自立した生活を送るための支援や居場所はたくさん必要ではないかと思えます。

日頃は各学校で担任を始め、多くの先生方が様々な働き掛けや関係づくりに力を尽くされているとは思いますが、大府市としてできることは何か、一緒に考えられたらと質問をいたします。(図1)

(1) 不登校の子どもたちの居場所づくりの充実・拡大について。

- ①「不登校」の子どもたちを通し、大府市として、大事にしていること、向き合うために意識していることは何か。
- ②小中学校での不登校の子どもたちへの対応など、大府市として特徴的な取組は何か、お答えください。

大府市には、子どもたちのモヤモヤした思いや悩みを聞いてくれる、心の教室相談員が各中学校に1人ずつ配置されています。身近な先生や友達、家族にも言えないことなど、何でも相談できる場は思春期の子どもたちはもちろん、保護者にとっても、大きな心の支えになっていることは間違いありません。

しかし、心の教室相談員の1日の勤務時間は、基本5時間あります。各学校の相談員の勤務は自由に決められるようですが、子どものいる時間の10時から15時までの配置が基本のようです。しかし、保護者からの相談であったり、緊急を要する場合は、定時の1日5時間では対応しきれません。

「朝、頑張って登校したけど教室へ入れない子」の受入れや、「朝から頑張り、夕方にしんどくなっ

一般質問通告書

て話を聞いてほしい子」など、心の波はいつ来るか、誰もわかりません。子どもたちが学校にいる時間に対応ができるよう、心の教室相談員の時間の延長又は増員で、「しんどくなったらいつでも駆け込める環境づくり」が必要ではないかと以下の質問をいたします。

③心の教室相談員の時間の延長又は増員により、子どもが在校中にいつでも駆け込める場所を拡大していく考えはないか、お答えください。

次も、今ある事業を拡大することで、より子どもたちの意欲や思いに寄り添うことができるのではないかと提案します。

不登校であっても同じように学習の機会を与えていくには、多くの受け皿が必要です。

昨年からはじめました中学生の無料学習支援「まなポート」は、ちょっと先輩である大学生が主体的に教えてくれるため、大人とは違う子どもたちの身近な目標にもできる取組だと思えます。また、「学校へは行けない、でも学びたい」、そんな子どもたちにとって頼もしい事業であります。

しかし、対象者は中学生となっているため、定員枠が空いていても対象でない高校生や小学生は利用できません。そこで、定員を超えていなければ、必要と認める子どもを受け入れる柔軟性があっても良いのではないかと考えます。

高校生ではあるが、「中学からの勉強を学び直したい」「小学生だが受け入れてほしい」との声もあります。学習は自立支援に直結します。条件の許す範囲で、自ら学びたい子どもたちの支援をしていくため、以下の質問をします。

④中学生への無料学習支援「まなポート」について、中学生以外であっても定員枠の範囲内であれば柔軟に受け入れていく考えはないか、伺います。

(2) 義務教育後の不登校などの継続的な支援について。

大府市では、中学生までは、手厚い支援を行っています。そのため、不登校の子が進学して、そのまま自立していく子もいるとは思いますが、新しい環境で、壁にぶつかることは不登校経験者だけの問題ではありません。新たに、高校生になってから不登校になるケースも当然あります。

しかし、大府市では義務教育を過ぎてから、又は不登校のまま年齢が上がれば、青少年女性課へはつながりますが、新しい相談者とすぐに新しい関係をつくっていくことが難しい子どもたちが多いのではないのでしょうか。

レインボーハウスから進学や就職をし、悩んだときにはレインボーハウスに相談に来たいというのが自然ではないのでしょうか。生涯を通じての支援が必要な子どもが多い中、せめて中学・高校・就職まで、対象者への継続した支援が受けられるのが理想ではあります。

そこで、質問です。

①生涯を通して、継続的な支援が必要な中、中学生までと高校生以上で相談先が変わる理由は何か、お答えください。

また、不登校者数は中学生が一番多くなっていますが、高校生の不登校も存在します。

一般質問通告書

そこで、質問です。

② 高校生・大学生の不登校の把握はどのように行っているか。

どの子どもでも学校をやめてしまいたいと思うこともあるでしょう。また、就職はしたが長続きせず引きこもりにつながるケースも多いのではないのでしょうか。

そこで、質問です。

③ 「学校を中退」「仕事を退職」するなど、生涯にわたり心の支援が必要な場合もあるが、大府市としてどのように対応しているのか。

自分の子どもが何らかの形で自立していない場合、将来の生活への不安が大きくなってくるのは当然の悩み、不安であります。毎日の食事や洗濯、金銭的にも自己管理ができるのか、不安は尽きません。そこで、質問です。

④ 親亡き後など、子どもは成人したが自立が難しい場合の生活支援は、大府市として、どのように行っているのか。

(3) 不登校等の家族を持つ家庭への支援について。

大府市では現在、研修会や家族のつどい、学習会などを行っています。その中でも、家族のつどいでは、当事者の家族同士でも励まし合ったり、情報の共有を行っています。そこで、質問です。

① 「家族のつどい」の取組で見えてきた課題や、今後、目指していく方向性は見えつつあるか。

家族を支えていくことは、当事者同様苦しんでいるケースもあるため、とても大事な場であります。それを大府市が行っているということは、とてもよいことでもあります。ざっくばらんに子どもの成長などを共感し合うことができれば、次に来るまでの原動力になるという声も聞いています。

そこで、各家庭に合った場所や居心地の良さを見つけてもらうために、知多半島で行われている多くの居場所を把握し、広域での情報共有を図ることが必要であります。また、これは自分の住んでいる地域の会には参加しにくいという家庭への配慮にもつながります。そこで、質問です。

② 家族の支えとなる「交流の場」などの情報を広域で共有し、身近にある会に参加しにくい世帯への配慮をしていく考えはないか、お伺いします。

③ 対象者に「交流の場」などの情報が届いていない場合もあるため、学校などと協力して情報を周知していく考えはないか、お答えください。

以上で、壇上からの質問を終わります。